

アオのハコ #22 sideB

扇町グロシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

花束の夢と、沈んでいく心と。

それを振り払ったのは、やっぱり笑顔。

ある朝の光景を、もう一つの視点から。

目次

1	ア オ の ハ コ
	# 2 2
	s i d e B

アオのハコ #22 side B

夢を、見ていた気がする。どこか不吉な夢を。

でもその内容は、スマホのアラームに掻き消され跡形もなくなってしまった。覚えているのは不吉さと、手にしていた花束の形だけ。

私は誰に、あの花束を渡そうとしていたのか。或いは、誰かに渡されたのだろうか。何にせよ、目覚めの頭には良くないものだ。普段はアラームを止めて暫く微睡んでいるけれど、そんな気分にはなれない。

——起きよう。今日は、戦う日だ。

県予選は、もう明日で終わる。今日負けてしまえば、そこでなにもかも終わってしまう。

また来年、なんて思えない。思ったとしても、私にそんな時間はない。

ミニバスの頃は、自分が成長し続けてる実感があつた。今日の私は昨日の私より上手くなつていて、明日の私はきつと今日より上手くなっている。そう考えていたし、実際そうだった。

でも、中学に上がる頃。自分が、思った速度で成長していけなくなった事に気付いた。

気づいてしまった。

中性的だった身体は、少しずつ「女」になっていく。シンプルだった心は、どんどん澱みを溜め込むようになっていく。

そんなことを意に介さず、伸び続ける天才も世の中には存在する。

でも、私は天才じゃない。

私にはそもそも、才能と呼べるものは無かったのだ。それでも努力を重ね、なんとか一歩一歩地道に上へと登ってきた。

でも、もう。それはもうじき、破綻する。伸び代は使い果たされ、衰退が始まる。そしてそれは、今日明日の事かも知れない。

今、この瞬間しかない。私が私でいられる、この短い間にすべてを決めなければならぬ。

ああ、——苦しい。バスケが好きで、それで続けてきて。それが、苦しい。

子供の頃に戻りたい。自分を疑うことさえなかった、あの頃に。

下へ降りておばさんに挨拶していると、不意に聞き馴染みのある旋律が耳に入った。

懐かしい、ラジオ体操の曲。昔は練習前にやったりもしたけど、すっかりご無沙汰だ。

音を追って行くと、そこは猪股家の庭で。大喜くんが、朝日を浴びて真剣にラジオ体操をしていた。

随分と健康的な……。

「千夏先輩、おはようございます！　なんか、じつとしてられなくて！」

私に気付いた大喜くんは、爽やかに笑っている。確か大喜くんも、これから県予選だ。今日は針生くんと組んでダブルス、明日はシングルス。どっちにしても、大舞台には変わらないだろうに。

——去年の私は、こんな顔が出来ていただろうか。一応これまでの経験もあつて、一年生ながらレギュラーとして県予選には出たけれど。出たけれど、私は——。

「私もやるっ」

大喜くんの隣に立ち、曲に合わせて体操に途中参加。

試合前にこんなに沈んでいてどうする、気持ちで負けたら勝てるものも勝てない。そんな簡単な事を先輩から教わるような、見下げ果てた先輩のままじゃ格好つかない。

身体を動かしながら、二人。

これから戦いの場に出る御互いを、鼓舞しあうように。

短く、言葉をかわしあう。

「明日、ですね」

「もう、明日だよ」

勝っても負けても、明日。明日、色んな事が決まる。

それはきつと、思い通りにはいかないだろう。でも、それは終わりじゃない。明後日も、その先も、ちゃんと「ある」。それが続く限り、私は終わらない。

「千夏先輩。明日勝つ、……明日が終わったら、一つ質問して良いですか」

大喜くんが一瞬言い淀みながら、真剣な顔をする。勝つても負けても、聞きたいことがある、というのだろうか。

「今じゃなくて？」

「あ、……はい」

さて、なんだろう。大喜くんから私に。……まさか「俺の事どう思ってますか」みたいな、告白的なアレだろうか。だとしたら、それはまあ——素敵だな。

でも、大喜くんには蝶野さんがいるしね。二人はお似合いだから応援したいけど、大喜くんがもし——。いやいや。さすがにそれは。

まったく、試合前なのに。こんな浮わついてて良いのやら。

ま、良いか。明日のオタノシミだ。試合が終わってからの予定、考えておいてもいいだろう。後輩くんが何をやる気なのか、じっくり期待しておこうかな。

いつの間にか膿んでいた心は、すっかり軽くなっている。ラジオ体操の効果か、それとも。……それとも、の方だな。

全部、楽しもう。私はずっと、私だから。

「大喜くん、バドって応援の掛け声とかある？」

「へ？ んー……一本、とかですかね」

なるほど、なるほど。

六月の朝は青く、澄み渡っている。

どこまでも広く青い、この空に届くように。

気合いを入れて、——腕を振り上げて。

「大喜、一本!!」

彼の行く先が、幸せなものであるように。

そこに笑顔がありますように。

願いを込めた私の声は、青空に吸い込まれていった。